

A-128 魚類の肝，肝臓中のA転換前のプロ-Aに関する螢頭組織学的研究

大阪樟蔭女大学芸。飯守三郎 道本和子 樟蔭東女短大 壺井輝子

目的 螢頭により生体中のビタミンA，A₂および転換前のプロ-Aの関係を明らかにし，プロ-AがA様螢光を発するようになる方法などを検討した。

方法 数種の淡水，海水魚の屠殺直後の肝，肝臓のプレパラートに就て螢頭下での観察，写真撮影，螢光度および螢光分光の経時的測定などをおこなった。

結果 (1) 生体中のAは螢頭下，UV励起により速やかに退色する黄緑色螢光(顕微螢光分光測定にて入max 510)を発する特異性がある。また螢頭組織学的にはA₂は退色する黄褐色の螢光を発するとされている。しかし，ニジマス，フナ，キンギョなどの肝，肝臓切片では励起直後は弱い黄褐色であるが次第に顕著な黄緑色となり、以後退色が遅い螢光微滴が大部分でこれ以外の螢光は殆ど認められない。またこれら切片はC.P反応陽性である。以上から螢頭組織学的には上述の螢光はA₂に最も関係が深いものと思われる。(2) 上記フナなどのプレパラートに滴水し，パラフィンにて封入，一昼夜経過すれば励起と同時に著しいA様螢光がみられる。(3) 上記切片を乾燥後，リノール酸エチルまたはメチルで溶解し滴水後，混和すれば組織から溶出した油滴はA様螢光を発する。(4) マイワシ，アジの肝切片でAとA₂との識別ができた方法によればA₂は殆どみられなくなり著しいA様螢光がみられる。(5) なお，β-カロテン(結晶)をリノール酸エチルに溶解後，加水すれば数日後にはA様螢光(入max 510)を発するようになる。(6) A₂と呼ばれているものが生体中でAに特異的な螢光を発しないのはAに未転換の状態のためと考えられる。